

27. 大阪府 追補

佐久間大輔・長谷川匡弘 (〒546-0034 大阪市東住吉区长居公園1-23 大阪市立自然史博物館 sakuma@mus-nh.city.osaka.jp, hasegawa@mus-nh.city.osaka.jp)

(A) 植物誌

i) 維管束植物 大阪府全体をカバーする維管束植物目録は改定されておらず、『大阪府野生生物目録』(大阪府編 2000)が基礎となっている。

近畿地方全域の植物誌を概観できる資料として『近畿地方植物誌』(村田源著, レッドデータブック近畿研究会編 2004)が大阪自然史センターから刊行された。京大理学部所蔵標本にもとづき『兵庫生物』、『近畿植物同好会会誌』に50年かけて連載された資料である。『改訂・近畿地方の保護上重要な植物—レッドデータ近畿2001』の基礎文献であり、近畿各府県の植物誌の基礎である。

府下の特定地域の植物誌は『堺市植物目録』『堺・みどり紀行 堺の植物誌』(堺植物同好会1998, 2001), 『北河内植物目録』(北河内自然愛好会2004), 『高槻市北部植物目録』『同補遺』(近畿植物同好会2005, 2012), 『枚方市の植物2002-2006』(枚方いきもの調査会植物部会 2007)などがある。『いのちの城・大阪城公園の生きもの』(追手門学院大阪城公園プロジェクト2008), 『新名神高速道路の生物標本』(西日本高速道路株式会社関西支社大阪工事事務所 2010)などは標本に基づく基礎資料として刊行された。このほか後述の自然史博物館出版物, 同友の会Nature Study, 近畿植物同好会会誌(大阪府植物目録補遺などが連載)・同会報, 堺植物同好会会誌・同会報, 関西自然保護機構会誌などに地域植物誌が掲載されている。

ii) 蘚苔類 『大阪府植物誌 増補改訂版』(堀勝1964)に児玉・中島による蘚苔類総説が書かれた後の基礎文献として, 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録『近畿地方の苔類I・II』(児玉務 1971, 1972), 『大阪府の蘚類: 中島徳一郎蘚類コレクション』(木村全邦, 佐久間編著 2008)がある。

iii) 菌類 大阪府の菌類相は関西菌類談話会の活動で採集報告が充実している。総合的な取りまとめはなされていないが, 佐久間(2009)など, 後述のレッドリストにむけて進展している。変形菌については田中・佐久間(2004, 2010)により110種が, 地衣類は山本好和(2006)により51種が報告された。

(B) 研究機関

大阪市立自然史博物館には入れ替わりはあるものの原生植物・菌類・化石研究者4名が所属している。研究報告, 自然史研究, 収蔵資料目録などの刊行物には同館標本のテーマ別目録を含め多くの資料がある(詳細は大阪市立自然史博物館HPを参照)。

この他, 大阪市立大学には植物生態研究室があるが, 市大植物園の研究室は環境応答分野へ転換している。他に大阪教育大学・大阪府立大学・大阪学院大学・大阪産業大学・大阪市立環境科学研究所などに植物分類・生態分野の研究者がいる。2012年には日本植物分類学会大会が大阪学院大学で開催された。

(C) 標本

大阪市立自然史博物館の植物標本庫(OA)には滋賀大学旧蔵の橋本忠太郎コレクション, 大阪府立大学総合科学部旧蔵の湿生・水生植物標本, また寄贈により辻井コレクション(大阪南部シダ), 鳴橋コレクション(バラ科), 本郷次雄菌類コレクションなどが加わった。さらに, 同博物館の大和川・淀川の調査により両水系の水草・湿生植物標本が充実した。また, 三木茂水草標本の解明が進み目録が改定された(『三木茂博士寄贈水草腊葉標本目録』志賀隆, 藤井伸二, 瀬戸剛編・著 2009)。標本庫利用には筆者に事前に連絡・相談を頂きたい。

(D) レッドデータブック関連

改訂を実現させるため大阪市立自然史博物館・大阪自然史センターの提案により大阪府・市・堺市など行政との協働事業として「大阪生物多様性保全ネットワーク」が組織され, リスト改訂やホットスポット選定に向けた情報共有と議論が始まっている。

(E) 植生・植物群落

近年, 府下の里山や草原性植生の認識の見直しが進んでいる。管理の歴史, 絶滅危惧植物の生育地としての再認識, 周辺の小湿地や水田などを含む景観構造としての認識など様々な観点を含むが, 大阪府の植物相の特徴となる部分でもあり, 解明が必要だ。山戸美智子ほか(2001)面積の縮小や管理方法の違いが大阪平野南部の半自然草原の種多様性に及ぼす影響。ランドスケープ研究 64(5), 561-564や, 湯本貴和編(2011)『里と林の環境史』, 須賀丈ほか(2012)『草地と日本人』などが参考になる。

(F) 今後の課題と最近の話題

伝統的に地域研究の担い手であった学校教員は世代交替と業務の増加で活動が難しい。アマチュアの高齢化も否めないが, 近畿植物同会による金剛山植物相調査など, 当地では活発な活動が維持されている。この活動を求心力に次世代のアマチュア研究者育成が急務でもある。

研究面では標本の遺伝情報利用も進む。周辺の研究者とともに, 博物館を媒介として地域の自然史理解に向かう植物研究を進めていきたい。